

令和 2 年 4 月 9 日

海外特別研究員最終報告書

独立行政法人日本学術振興会 理事長 殿

採用年度 平成~~29~~³⁰年度

受付番号 201860196

氏 名 新井 拓哉 

(氏名は必ず自署すること)

海外特別研究員としての派遣期間を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。

なお、下記及び別紙記載の内容については相違ありません。

記

1. 用務地 (派遣先国名) 用務地: パリ (国名: フランス)

2. 研究課題名 (和文) ※研究課題名は申請時のものと変わらないように記載すること。

意識の統合的理論の構築—認識論的、存在論的、神経科学的観点から

3. 派遣期間: 平成 30 年 5 月 14 日 ~ 令和 2 年 4 月 2 日

4. 受入機関名及び部局名

Institut Jean Nicod, Ecole normale supérieure

5. 所期の目的の遂行状況及び成果…書式任意 書式任意 (A4 判相当 3 ページ以上、英語で記入も可)

(研究・調査実施状況及びその成果の発表・関係学会への参加状況等)

(注) 「6. 研究発表」以降については様式 10-別紙 1~4 に記入の上、併せて提出すること。

本研究の目的は意識についての統合的理論の構築を行うことである。以下では、派遣期間に行った研究を(1) 意識研究のタイプの分類と整理、(2) 意識の道徳的価値の理論、(3) 意識概念の分析、(4) 意識の神経科学的研究のための基礎研究、(5) 知覚的意識の存在論についての理論に区別し、それぞれについて説明していく。

(1) 意識研究のタイプの分類と整理

哲学、心理学、神経科学といったさまざまな観点から意識の理論が提案されているが、そうした意識の理論が意識についてどういう問いに答えているのかは必ずしも明らかではない。特に、ある意識理論が明示的に答えを提案している問い(Q1)と、暗黙の裡に答えを前提している問い(Q2)が区別されていない場合がある。たとえば、ある意識理論は「どうやって私たちは自身の意識のあり方を知るのか」という問いに対して「脳が特定の回帰的な神経プロセスによって自分自身のあり方を表象することによって」と答える。この場合、その意識理論は「どうやって私たちは自身の意識のあり方を知るのか」という問いへの答えを明示的に提案しているが、「意識は世界とどのような関係にあるのか」という存在論的な問いに対しては暗黙的に「意識は脳状態によって実現される(あるいは、脳状態と同一である)」という答えを前提していることになる。意識の理論を構築する場面において、Q1 への答えを支持する論証や証拠などは提示されるが、Q2 に対してはそうした議論や証拠の提示が行われなことが多い。このことは二つの問題を生む。まず、(i) 二つの意識理論の間の対立が Q2 への答えにかんするものであ

った場合、その対立をどう調停すべきか明らかではない。(ii)意識理論に基づいて意識研究のタイプを分類すると Q1 と Q2 の区別が不明瞭になりやすく、混乱を招きやすい。

この点を踏まえて、本研究では意識研究のタイプを「意識についての問いのタイプ」に基づいて分類することを提案した。具体的には、(A)定義にかかわる問い―「意識」という語をどう定義するか、(B)認識論的問い―意識のあり方をどうやって知なのか、(C)現象論的問い―意識はどのようなあり方をしているのか、(D)存在論的問い―意識と世界はどのような関係にあるのか、(E)価値論的問い―意識をもつことにどのような価値があるのか、という五つの問いを根本的な問いのカテゴリーとして設定し、それぞれのカテゴリーに対していくつかの下位分類を提案した。そのうえで、それぞれの問いに対するさまざまなアプローチを整理した。

本研究成果は 2018 年 6 月にポーランドで行われた The 22nd Annual Meeting for the Association for the Scientific Study of Consciousness で発表された。そこでいただいたコメントをもとに改定し、“A map of consciousness studies: questions and approaches” という論文として *Frontiers in Psychology* 誌の特集号である Integrating Philosophical and Scientific Approaches in Consciousness Research に投稿し、現在査読中である。

(2) 意識の価値の理論

意識をもつことにどのような価値があるのか。この問いを扱う意識の価値論は近年注目を集めつつある。本研究では意識の道徳的価値と意識の美的価値について探求した。以下ではそれぞれの価値についての研究成果を述べていく。

私たちのある対象にたいする振る舞いは、その対象の意識の有無に応じて変動する。特に、意識の有無は私たちがある対象を道徳的考慮の対象とするかどうかに関わると考えられる。しかし、どうして意識の有無がその対象の道徳的身分にかかわるのかはまだ明らかではない。本研究では、「かけがえのなさ(irreplaceability)」という道徳的概念に注目し、どのように意識がその主体に「かけがえのなさ」を与えるのかを論じた。

倫理的な文脈において問題となる「かけがえのなさ」は、「X はかけがえがない＝X を別のものと置き換えることは悪い」と定義される。この意味での「かけがえのなさ」は「規範的なかけがえのなさ(normative irreplaceability)」と呼ばれる。規範的なかけがえのなさはさらに三種類に区別される。(A)自己相対的なかけがえのなさ―X は X 自身にとってかけがえがない(＝X を別のものと置き換えることは X にとって悪い)、(B)他者相対的なかけがえのなさ―X は Y にとってかけがえがない(＝X を別のものと置き換えることは Y にとって悪い)、(C)絶対的なかけがえのなさ―X はそれ自体でかけがえがない(＝X を別のものと置き換えることはそれ自体で悪い)の三種類である。

本研究では、人間主体がそれぞれのタイプのかけがえのなさをもつためにはどういう条件を満たしていなければならないかを明らかにしたうえで、その条件と意識とのかわりを論じた。特に重要なのは、「自己相対的なかけがえのなさ」と「他者相対的なかけがえのなさ」は関連する主体の福利や幸福の観点から分析されるのに対して、「絶対的なかけがえのなさ」はまさに意識がもつ内在的な価値によって実現するという論点である。現在ではこの研究成果を論じる論文“Normative Irreplaceability”を執筆中である。

素晴らしい景観や建築物を眺めたとき、私たちは時に「驚嘆の念(feeling of awe)」を抱く。哲学や美学では、ある対象が驚嘆の念を喚起するということはその対象が美的価値をもつことの証拠だと考えられてきた。それを基にして、私は次のように論じた。(i) 私たちは意識の謎や複雑さに対して驚嘆の念を抱く。(ii) このことは、意識が美的価値をもつことの証拠となる。この研究成果は Rice 大学でのセミナーで発表され、そ

こでのコメントを踏まえて、現在 “aesthetic value of consciousness” という論文として執筆中である。

(3) 意識概念の分析

近年の意識研究では「現象的意識」という概念が議論の中心となっている。「現象的意識」とは主観的な現象である意識をそのようなものとして（つまり、行動主義的・機能主義的な観点から操作的に定義せずに）捉える概念だとみなされている。多くの意識研究者は私たちが現象的意識をもつことを所与の事実と認めたうえで、現象的意識がどのような認知的役割を果たしているのか、どういう神経現象によって成立しているのか、といった点を論じてきた。しかし最近になり、「現象的意識は存在しない」と主張する錯覚主義(illusionism)という立場が影響力をもつようになってきた。多くの意識研究者にしてみれば、錯覚主義は不可解で馬鹿げた立場でしかない。そうした論者は「私が主観的現象としての意識をもつということは、疑おうとしても疑えない事実の一つだろう」考える。他方で、錯覚主義者はまさにそうした意識の存在を疑えると主張しているように見える。一見したところでは、この根本的な対立をどのようにして分析すればよいのかは明らかではない。

本研究では、錯覚主義者(illusionist)と反錯覚主義(anti-illusionist)の間の対立は単に語の定義をめぐる対立(terminological disagreement)に過ぎないと論じた。主に「現象的意識」という語は「ある主体がある経験をもつことがそのようなことである何か(what it is like for a subject to have an experience)」という表現によって定義されることが多い。この表現によって定義される限りでは、錯覚主義者も現象的意識の存在を否定しない。錯覚主義者が現象的意識の存在を否定するのは、「現象的意識」という概念が哲学的ゾンビやマリーの部屋などの思考実験を下敷きに「物理的／機能的な性質とは異なったもの」として（部分的に）定義されるとき、また、「ある現象的な意識経験をもっているように感じられるならば、実際に現象的意識をもっていることになる」という「見えと実在の区別の不可能性」によって定義されるときに限られる。他方で、反錯覚主義者は現象的意識を「ある主体がある経験をもつことがそのようなことである何か」という表現によって定義したうえで、「現象的意識が物理的／機能的な性質と異なっているかどうか」という問いや、「ある現象的な意識経験をもっているように感じられるとき、その意識経験を実際にもっていることが帰結するのか」という問いを定義上の問題ではなく実質的な問題として捉えている。したがって、錯覚主義者と反錯覚主義者の間の対立は、「現象的意識」という概念の定義に「物理的／機能的な性質とは異なったもの」や「見えと実在が区別できない」といった条件を含めるかどうかの対立であり、定義をめぐる言語的なものであることになる。この研究成果を論じる論文 “Illusionism and Definitions of Phenomenal Consciousness” は Philosophical Studies より出版された。

(4) 意識の神経科学的研究のための基礎研究

ここ20年程で意識の科学的研究のパラダイムが整備され、神経科学的な意識研究が進みつつある。だが、科学的な意識研究にとって実験参加者より豊かで信頼できる内観報告データ(introspective reports)が取得できることは決定的に重要であるにもかかわらず、そうしたデータを取得するための方法論はいまだ十分に発展していない。

本研究は二つの研究目的をもつ。(A)意識研究について事前知識がない実験参加者の内観報告能力を向上させるためのトレーニング法を開発すること、(B)十分な内観報告データに基づいていない研究パラダイムの妥当性を検証しつつ、その不備を改定すること。(A)については、そうしたトレーニング法のパイロット版を開発し、2018年12月にオーストラリアのシドニーで行われた Australasian Society for Philosophy and

Psychology 2018 で発表した。そこで受けたコメントやアドバイスを参考にして共同で執筆した “Developing a short-term phenomenological training program: A report of methodological lessons” という論文は、*New Ideas in Psychology* 誌から出版された。(B) については、両眼視野闘争という心理現象をもちいた意識研究のパラダイムに注目した。両眼視野闘争は最近の科学的意識研究において多く使われているが、その現象学的側面については十分な研究がなされているとは言い難く、そのためこの研究パラダイム自体に疑念を向ける余地がある。本研究では、二人称的インタビュー法など実験参加者からよりより内観報告を得るための手法を用いて、両眼視野闘争の現象学的側面について豊かなデータを取り、そのデータを用いてこれまでには発見されていなかった両眼視野闘争の現象学的特徴を炙り出した。この研究成果は 2019 年 5 月にドイツの Witten で行われた FIRST-PERSON SCIENCE OF CONSCIOUSNESS 学会で発表された。そこで受けたコメントやアドバイスを参考に “A new experimental phenomenological method to explore the subjective features of psychological phenomena: its application to binocular rivalry” という論文を共同研究者と執筆し、*Neuroscience of Consciousness* 誌に投稿して現在査読中である。

(5) 知覚的意識の存在論についての理論

私たちが何かを見たり聴いたりするときに生じる意識経験は一般的に「知覚的意識」と呼ばれる。知覚的意識の内在主義者は、知覚的意識は脳によって生み出されるとする。それに対して、知覚的意識の外在主義者は、知覚的意識は外界と脳を含めた身体との相互作用によって生み出されるため、意識は外界に広がっている（＝意識の構成要素には外界に存在するものが含まれる）と主張される。知覚的意識の外在主義は内観によって支持される。つまり、私たちの知覚経験がどのようなものかを内観すると、そこには椅子やコーヒークップといった外界の対象が含まれているように見えるのである。

他方で、近年英米分析系の心の哲学で精力的に論じられてきたトピックの一つに、「現象的志向性」というものがある。現象的志向性の擁護者は、「私たちの心が外界の対象についてのものであるのは私たちが現象的意識をもつからだ」と主張する。この立場は一般的には知覚的意識の内在主義と結びつくことが多い。それに対して私は、知覚的意識の外在主義と現象的志向性は不整合でないばかりか、現象的志向性をめぐるいくつかの哲学的問題は、知覚的意識の外在主義と結びつけることによって解消されると論じた。この議論は “naïve realism and phenomenal intentionality” という論文としてまとめられ、現在 *Philosophia* 誌で査読中である。